

いつもありがとう

一宮中・1 美崎 心愛

夏休みが始まって、少し経った頃、私は仲良しの友達と二人で電車に乗って、夜の動物園と遊園地へ遊びに行くことになりました。

昼とは雰囲気の違い動物園。夜に観るライオンは、いつもとは違う迫力や怖さがありました。暗い夜に、きらきらと光るメリーゴーランドでは明るい音楽が流れる中、赤色の尻尾をした馬に乗って楽しみました。乗り放題の遊園地で、これでもかというくらいに遊んで、お腹が空いたので星空マーケットに向かいました。

自分で食べたいものを選んで、友達と楽しく話しながら、お腹いっぱいになるまで食べました。そんな友達と行く初めての夜の動物園。時間を忘れて閉園まで全力で楽しみました。

友達との帰り道、

「最高の一日だったね。」

と話しながら門へと歩いていきました。私は門のそばにある時計を見た時に、ある事に気が付き、私は思わず

「帰りの電車を調べてない。」

と大きな声をあげました。そして焦りながら電車の時間を調べたら、二十二時過ぎという、中学生が子どもだけで帰るにはとても危なく遅い時間に家についてしまう電車しかありませんでした。そして友達には、

「電車の時間見つかってよかったね。」

と言いました。でも私は、友達のように電車の時間が見つかったよかったとは思えませんでした。なぜなら家を出る前に、父と、今日は二十一時過ぎに帰ってくるという約束をしていたからです。それなのに私は、電車はたくさんあるだろう、という軽い気持ちで帰り

の電車の時間を調べずに、楽しんでいました。その事に気が付いた時にはもう二十一時前で父との約束を守るには、どう頑張っても無理な時間でした。このことに気が付いた時、父だけではなく、不安な気持ちにさせてしまっている母にも怒られてしまうという気持ちから、不安や怖い気持ちでいっぱいになりました。早く家に帰らなければいけないということはよくわかっていたけれど、心の中では怒られてしまうという理由から、家に帰りたくないと思うばかりでした。それでもなるべく早く帰れるように、

「電車を乗り過ぎたらヤバイ。」

と友達と一緒に走って駅まで向かいました。

そして無事に駅に着き、急いで電車の中へかけこんでいきました。私は静かな電車の中で、遊んでいた時は楽しくて、笑顔が絶えなかったけれど自分が犯してしまった過ちから、遊んでいた時のように笑えなくなり、楽しかった一日がこの一瞬で台無しになってしまったと心の中で深く反省をしていました。そしてどんどん自分が降りる駅が近づいてきた頃、怒られるのが怖くなり、

「時間が止まったらいいのに。」

と強く思いました。でも、そんな魔法のような事が起こる訳ありません。

時間はどんどん過ぎていき、とうとう最寄り駅に着き、岩のように重い足を動かして階段を登っていきました。そして、友達と別れた後、不安で今にも簡単に潰れてしまいそうな気持ちを抱えて、家へと帰りました。

家へ着き、玄関の前で深呼吸をし、覚悟を決めてから玄関のドアを開け、心を振り絞り大きな声で

「ただいま。」

と言ったら家族みんなテレビを見ていたのに一気に自分に視線が集まりました。

そして父が、少し経ってからテレビを止めて、口を開き

「どういふつもりなの。」

と私に問いかけました。私はそう聞かれたとき、感情がごちゃごちゃになり、なんにも言えませんでした。そして案の定、お父さんに怒られてしまいました。父は私に、

「まだ中学生だけで夜遊ぶには早い。この一年、夜に出歩くのは禁止。」

と言いました。私は泣きたくありませんでした。しかし、少し先に友達と浴衣を着てお祭りに行く予定があり、そのために浴衣を準備したりしていたので、その約束が打ち消しになってしまうという思いを、ずっと前から一緒に楽しみにしていた友達に、申し訳ない気持ちと、不甲斐ない自分への悔しい気持ちで泣いてしまいました。それを見た母が、

「お父さんの言っていることは正しいけど、今日失敗して学習したんだから、今度のお祭りのために、せっかく新しい浴衣も買ったから、次、約束を破ったらでいいんじゃない。」

と助けてくれました。すると父も納得してくれて、少し安心しました。そして、父が注意した後、

「うるさいって思うかもしれないけど、自分もお母さんも心愛のことが心配で注意しているんだよ。」

と言われて、最近怒られることが多く、自分はお父さんからどうでもいいと思われていると思うので、

「自分のことを心配してくれていたんだ。」

と親からの自分への愛を感じて安心し、さっきまで心配でどきどきしていた心が少し温かくなりました。そして父は、

「お風呂に入っておいで。」

と優しく、なんだか安心するような声で話しかけてくれました。その言葉を聞いて

「自分は大事にされているんだな。」

と改めて感じました。そして私はお風呂に入りながら、悪いことは

悪いと注意してくれて、何かをやり遂げた時は、自分よりも喜んでくれる、そんな世界で一番の父と母にこれからは迷惑をかけたり、心配をさせたりしないようにしようと思いました。そして、中学生はまだ大人というわけではないので、大好きな両親に頼り、自分が大人になった時に、何百倍の恩返しをして、

「心愛が私たちの子供でよかった。」

と思ってもらえるような立派な大人になりたいと思いました。